

久保田茜さんと話す：

「人間社会を飲み込んで産みなおす」

茜さんが、子供達、ご両親、祖母共々の四世代で、大阪から、しまなみ海道の大島へ引っ越して丸6年が経とうとしている。その間、船舶の免許を取り、ハイエースを改造し定期的な旅を始め、親と一緒に家を基礎から作り、沢山の動物を拾い、飼い、子供を産み、里子を受け入れ、野菜を育てる生活をしてきた。試行錯誤しながら、日々葛藤しながら生きる茜さんと、とことん生々しい「生活」の話を、語り尽くしたいと思う。

話をした人：久保田茜・久保田テツ・志賀理江子・清水チナツ・長崎由幹・佐藤貴宏・菊池聡太郎

志賀：今日は、久保田茜さんが来てくれました。茜さんとは、もうかれこれ・・・10年以上前からからお世話になっていると思う。私、思春期後はほとんど、小さな子たちと遊んだり、触れ合わないまま、自分が子を産むことになったのね、で、これはまずい、全然お腹にいる子供のこと、どんな生き物だったかすらわからない！ってなって、当時、茜さんから生まれたての瑩良ちゃんを触るべく、抱っこさせてもらうべく、会いに行かせてもらったんでした。とはいえ、ホワホワの瑩良（のら、長女）ちゃんを抱

っこさせてもらっても、泣いたらすぐ茜さんに泣きました、って渡して、今思えば、ほんと迷惑な訪問でした。それから時間が経って、2019年1月に茜さんの住む島まで遊びに行って、生活を見せてもらって、一緒に遊んで、すごくいい影響をもらったんだけど、今日の最初は少し時間を遡って話を聞きたくて。茜さんは、東京生まれ育ち？

茜さん：両親は大阪からの上京組だけど、私は東京生まれ東京育ち。結婚を機に大阪へ移住したんだけど、そのタイミングで両親が早期退職したので、両親も大阪へ戻ってきて、両親が近くに来たってということでよし再就職しようって事になったの。何社か受けて、一番安定してそうだったのが大阪が本社のカタログ通販の会社でね。私ほら、口八丁だけで生きてきてるから、東京でバリバリやってましたって。子どもいても実家のサポート体制万全なんでフルで働けます！って。

一同：笑

茜さん：入っちゃえばこっちのもんだから。ありがたい事に採用してもらって、真面目にフルで働いてたんだけど、結構すぐ二人目ができて。でまた産休育休で1年半ぐらい休んで、でまた復帰して、それも1年も働いてないかもしれないね、当時の同僚には本当にお世話になった。フルタイムで働いてるときは、保育園の送り迎えも全部両親にサポートを受けないと、もう全然無理だった。もう本当に「おんぶにだっこ」ですごい感謝してる。でもやっぱり都

会でフルタイムで働きながら子育てていうのは、かなりしんどくて。

志賀：そうだと思う。

茜さん：うん。なんかもう一日中怒ってる。とにかく時間ないし。朝から、早くしろ早くしろ100回ぐらい怒鳴って、どうにか連れてって、帰りもね、会社出て走って、満員電車、で駅からまた走る！みたいな。でも日本の会社にいると、基本的にそういう状況がデフォルトなんだよね。子供三人いて、共働きで、実家も遠いとか。私からするとありえない状態の人でも気丈に頑張ってた。私の上司は50過ぎて独身の人だったけど、1回、1週間半か2週間ぐらいの休みとったんだよね。で海外に行ってきますみたいな。新卒採用で勤続何十年とかだったらしく、褒美として休みがもらえるみたいなね。で、私は何十年も働いてそれ？・・・って唾然として。昔外資系にいた時は、クリスマスから年明けまで休むとか普通だったしね。で、周りの子達も「私も早く勤続何十年になりたいです～」みたいな雰囲気だし。やべーなこの世界と思って。でもそこではそれが当たり前だし、それしか知らん人たちだから、もうそれでもうすごい福利厚生が素晴らしい会社って印象みたい。もちろん給料もね私より全然高い。わかるけど。

志賀：でもそこで、あ、これは何かおかしいなって日々の状況に対して思うのは、両親が茜さんをワイルドに育てた

っていう、種まきが土台にあるのかなって、あの、昨日話してた、ゴムボートの話とか。

茜さん：ああ、父親が、和歌山で急に「川下るぞ〜」って言ってゴムボートを持ってきて、私と兄が小学生くらいの時にぼいって乗せられて、ただひたすら下っていったやつ。「お父さん大丈夫なの？」で聞いても「大丈夫だ〜」みたいな。ちょっと浅瀬みたいなところになると「ゴムボート持ちあげろ〜」みたいなね。で、「どこまで行くん」って聞いたら「行ける所まで行くんだ」って。それで、これマジで無理だなんていう滝があって、柵で止められて。そこまでだった。当時は携帯も何もないから、ひとまずボートを川岸に上げて、すぐ近くにあった民家にピンポンって。向こうの人からしたら、玄関開けたらずぶ濡れの親子がいて「大丈夫ですか事故ですか？」って心配されて、笑で、父親は「電話貸してください」と。

志賀：笑。いや〜その話聞いて、どんな種でも、やっぱり蒔かなきゃなって思った。だって社会生活の中で、あれこれおかしいぞって思えなかったら、そのまま考えもせずし過ぎてしまう。それが幸せかもしれないけど、でもいつかどこかで心にひずみが生まれてしまうかもしれない、だから、その前に色々、常識はずれな面白い経験はしたほうがいいなって。

佐藤：僕も8歳の子供がいるんだけど、なんかこう8歳まで育ててみると、良いことも悪いことも子供はそれを覚え

ていてその経験ってというのが彼に良くも悪くも刻まれてる。だから茜さんも昔、川下った経験って無意識に刻まれたものとして記憶されてるんだろなって。

茜さん：それが良いことだったのか、悪いことだったのかって、後から考えたらあれやべーとか、後から考えたらすごいよかったのとか、あれはねーだろとか、色々思うところもまた後でいいと思ってる。捉え方はそれぞれ違うし。何か「いいこと」だけ教えるっていうのもなんかね・・・

佐藤：うん、違うなって思う。川下りも怪我したりなんかしてたら、何だかんだ違う経験になってるもんね。

志賀：自分の頭で考えてほしい、親は間違える時もある。

茜さん：親が無謀な人たちだっていうのはすごい感じてた。キャンプとか行ってもすごい無謀なんだよね、やるのが本当に無茶苦茶なのよ、無計画な人たちだから。思いつきでキャンプ行くぞ〜ってなったら、30分ぐらいでパーッって準備して目的地も曖昧なままでかける。ホテル予約してとかじゃないから、いつも野営地を決める頃には真っ暗だった。父親が特に無計画で、いつかヘタこくことあるだろうなこの人たちはみたいな、なんかそういうスリリングな感じは常にあった。

志賀：でも、それでも守りが堅くならなかったんだね、反面教師でなったりするけど。

茜さん：でも、この人たちやべーなっていうのと、逆に、この人たちがいけるって言うてるから、いけるんじゃないか、みたいな妙な信頼もあって。それ半々ぐらい。

佐藤：しっかりしなきゃみたいな。笑

茜さん：みたいなのもあった、そうそうそう。

志賀：茜さんが、弟を育てたっていうのもすごいよね。

茜さん：でもそれ母親が全部計画してたらいいんだよね。母親が一人っ子で、自分が子供と接した経験がない分、自分の子供には子供をみせる経験をさせてやろうと思ってたらしい。私と兄には弟を育てさせてね、歳の離れた弟は、私か兄の子どもの面倒を見る事になるだろうって。実際そうだった。笑。弟は私ほど甥っ子姪っ子の面倒は見なかったけど、でも間近で子育てを見てた。母親は計画通りだったけど、後付けじゃないかって薄々思ってる、笑。でも私にとって、弟の面倒を見たことはすごい大きかったと思う。

志賀：茜さんちに行ったとき、知らない兄ちゃんがうね（次女）を肩車してたから、その兄ちゃんの子供だと思ってる、しばらく知らない親子だと思ってたら、その兄ちゃん

はお助け隊みたいなので、たまたま来てた人だったよね。この家は色々な人出入りして、風通しいいなーって、気が楽っていうか。私、子供の頃、家族と言われる契約の中で、家族が閉じてその中だけで出来上がるルールとか、そういう感覚への恐怖がすごくあって。

茜さん：みんな子どもがまだ1人でしょ。2人以上になると、こっちのキャパが無理。物理的に1人で見られなくなってくる。今震災とかあったらさ、私絶対3人とか同時に連れて行けないだろうし、確かにそうなるをやっぱ別のフェーズに入らざるを得ないわけよね。もう誰かに助けてもらわなきゃいけない。それこそ独身の男が近くにいたらめっちゃ使うし。笑

志賀：私もそれは、存分にある、子供できてからさらに、超助けてもらってる。

茜さん：専業主婦だったらさ、ついつい1人で子ども見られるから。がんばろうと思えば頑張れちゃう。だから、1人で面倒見られないところに自分を追い込むっていうのは必要かもしれないと思った。

志賀：私、清水さん、長崎さん、菊池くんに至っては・・・「全裸の被写体からオムツ替えまで」っていうなんか本当になんかこう、ぐちゃぐちゃになって全力で助けてもらった、ほんと。

茜さん：そうそうそうそう、ぐちゃぐちゃな中で研ぎ澄まされる感覚っていうのがすごいあると思う。この人は任せられるとか、ちょっと任せられないなみたいなのとかもそうだし、そういう人が見えてくる。役割分担とかもお互いの空気感でできるようになると、そういう感覚が養われるよね。

志賀：茜さん、今、里子を預かってるでしょ。でもこないだ里子の親に自分の子、預けてたよね。笑 「そんな人、日本で探しても私しかいないと思う」って言ってて、笑ったわあ〜。

茜さん：私が住んでいる愛媛県の児相の人がすごく良くて。児相ってすごいデリケートな問題を扱う部署だし、行政はやっぱり危ない橋は渡らないってタイプが多いでしょ。だけどそこのトップの人が、自分の保身よりもとにかく子供目線で考えてくれる人。そういう人のもとで里親になれてるから、実親さんと直接連絡を取り合いながら面会もさせているし（普通ではありえないみたい）。もちろん実親さんとの関係が良好っていうのもある。里子とうちの末娘はほぼ同年だから、いっつも一緒に遊んでるわけよ。で、ある日ママと面会って時に、末娘が私も行きたい！って。で実親さんに「うちの子も連れて行ってもらってもいい？」って聞いたら、どうぞ、みたいな。笑

志賀：わはは、イける、っていう肌感覚がすごい。

茜さん：制度と皮膚感覚の「はざま」というか、「溝」みたいなのがすごく大きくなって感じる。皮膚感覚でいったら「いけるんちゃう？」みたいなことでも、やっぱり制度的にダメだったり。制度を外れると、誰も責任が取れなくなるから。まあ要は責任問題だよ。でも現場の私たちは、その溝に落ちていく子供たちを日々見ているし、常に葛藤するよ。本当にそれが子供のためになってるのかな。その制度は本当に完璧なのか？って。

志賀：うん、その溝で苦しくなってしまいうんだよね、で、結局安全な方を、自分も選択してしまってるなあと思う。責任の話で繋げていうと、小学校6年生の茜ちゃんの長男、丸慈（まるじ）が、この今まさに旅をしてるよね。

茜さん：うん、夏休みいっぱい使ってね。終業式の朝に、キャンプ道具を積んだ自転車から家を出て行って、神戸で中一の友達と合流して、2人で北海道まで3人目の友達に会いに行くっていう。この春に「Ride a Life Journey」っていうサイクリングツアーに参加したの。アテンドしてくれた西川さんっていう人は、国内外のストリートでコーヒーを無料で振舞う「フリーコーヒー」っていうのをやってる人。例えば、日韓関係が悪くなったときとかにソウルに行くとかね。その人が、子供を連れて自転車旅をすることを毎年企画をしてて、それに丸慈が参加したいって言って春休みに参加したの。その旅で、ロングライドとか野営とか、自転車旅のスキルが身について、かなり自信がついたみたい。で、そのときの仲間が神戸と北海道だった



の。旅が終わった時に、夏休みに北海道まで会いに行くから！って約束してたらしくて。

佐藤：それは子供同士で話して？

茜さん：そうそう、再会の旅を自分たちで作った。最初はノホホンと旅行する〜くらいの感じだったんだけど、私が「旅の資金は自分で稼ぎな」って言ったもんだから、そこから出発まで資金集めに奔走することになった。まずはFacebookアカウント作ってあげて、でもこれなんか年齢制限あるんでね、本当は丸慈の年齢だと作れないんだけど、裏技で。

志賀：それも肌感覚だね。

茜さん：Facebookでアルバイトとか、資金援助とか、スポンサーとか募集したりして。そしたら予想以上の反響で、ありがたい事に、資金だけでなくて色々な人のサポートを受けられることになった。応援してくれたり、楽しみにしてくれる人がたくさんできた。同時に責任もめっちゃあったから、そこも彼にはすごいプレッシャーだったと思う。旅の間も、毎日Facebookに旅の様子をアップしなさいって。それが一番の恩返しになるからって言って。装備品とかアウトドアの知恵とかは、おじさん（私の弟）に色々教えてもらって。ロープワーク非常時の応急処置とか。

志賀：日本は色々問題あれど、小学生が一人旅できる国でもある。アメリカは違法だし、きっと多分メキシコも、夜子供達だけで野宿は、場所にもよるけど、多分難しいんじゃないかな。無論、路上で生活している子供もいるわけだけど。危なくなったらそれはいつでも、どこでも危ないけど、基本、子供達が自転車旅ができる、この国は、すごく良いこととして考えたいよね。

茜さん：本当にそう思う。でも、子供だけで旅なんてさせられないって親めっちゃいるでしょう。

志賀：ほとんどそうだと思うよ9割そうよ。

茜さん：交通事故怖いけどさ、交通事故なんかどこでだってさ、起きるじゃない？でそれが旅行先だろうが近所だろうか同じことでしょ。旅行先だからリスク上がることじゃない。

佐藤：100%の安全を追求したら車運転できないもんね。横断歩道も渡れなくなっちゃう。

茜さん：すごい心配してる人に、じゃあ何が心配なのかって具体的に聞いていくと、実際はとてつもなく漠然としてるんだよね。私は逆に、リスクを取らないことで捨てているものっていうものに対して、みんな目を向けてなさ過ぎるんじゃないかって思ってる。子供の安全安心みたいな学校教育とかも含めて、子供を取り巻く環境作りがリスクを取らない方に行きすぎて、子どもだけじゃなくて社会全体がそう

かもしれないけど、それによって捨ててる物に、あまりにも無自覚なんじゃないかって。

志賀：それが豊かなことなのね。「ぼんやりとした不安」で芥川龍之介は死んだけど、茜さんの場合は、その不安が漠然としているのなら違うように考えるっていうスタンスが、素晴らしい。笑

茜さん：そうでしょ。だからフルタイムで新卒からずっと同じ会社に勤務して勤続何十年で2週間休み取れて、よかったみたいなお人たちが、じゃあそうじゃない生き方してる人たちが、自分には無いどんな物を得ているのかって事にもすごい無自覚。無自覚というか自覚する術がない。

佐藤：そうね、知る方法がないよね。

茜さん：今はネットがあるから、情報としては色々な生き方してる人いるよねってのは知ってる。でも情報として知ってても、結局肌感覚として分かってない。今回の自転車旅とかも、理屈では自転車旅にはこんなリスクがあるかも？って頭で考えようとするけど、やっぱりそれを皮膚感覚に落とすっていうところを、省きすぎてる感じがする。

私自身がそういうフィジカルな感覚が欠落してるなって事を痛感している。私も都会で生まれ育って、スポーツもしてなかったからフィジカルな経験がほとんど無い。そういう体感に対するコンプレックスもずっとあるから。休みの

日にキャンプとかはしてたけど、そんなのたかだか週末の
娯楽。自然の中で生活したこともないし、自分の体で乗り
越えたっていう経験が少ない。そういう自分自身のコンプ
レックスってのがものすごく大きいんだよね。インターネ
ットの初期世代でもあるしね。私は、これから先そういう
感覚を得るのは無理だろうと思ってる。やっぱりそこは、
子供の時期でしか感じられないんじゃないかと思うし。

志賀：いつからでも全然遅くないって思いたいけど。子供
の時期って大事だね。

茜さん：だから子どもに過剰に期待してるところがある。

志賀：でも楽しんでるもんね。

茜さん：親にも言われるよ。お前は子どもに過剰に期待し
すぎだって。時々、反省もする。

志賀：子供がワイルドに育つことを期待する娘。笑。あり
のままに育って・・・なんて口ではいうけどその逆をして
しまう親は多いのかも。女の子が生まれたら地下室に閉じ
込めるとか、冗談でも言っちゃうような人はいるもの。

茜さん：いやでも笑い話じゃないぐらい。本当にねやっぱ
りみんな無自覚に閉じ込めてる感じだよ。

志賀：日本、様々な問題あれど、小学生が一人旅できる国で
もある。アメリカは違法だし、きっと多分メキシコも、夜

子供達だけで野宿は、場所にもよるけど、多分難しいんじ
ゃないかな。無論、路上で生活している子供もいるわけだ
けども。危なくなったらそれはいつでも、どこでも危ない
けど、基本、子供達が自転車で旅ができる、この国は、す
ごく良いこととして考えたいよね。

茜さん：本当に、こんなことさせられないって親めっちゃ
いるでしょう。

志賀：ほとんどそうだと思うよ9割そうよ。車道走るだろ
うから交通事故は怖いよね。

茜さん：交通事故怖いけどさ、交通事故なんかどこでだっ
てさ、起きるじゃない？でそれが旅行先だろうが近所だろ
うか同じことでしょ。旅行先だからリスク上がることじゃ
ない。

佐藤：100%の安全を追求したら車運転できないもんね。横
断歩道も渡れなくなっちゃう。

茜さん：すごい心配してる人に、じゃあ何が心配なのかつ
て具体的に聞いていくと、実際はとても漠然としてるんだ
よね。私は逆に、リスクを取らないことで捨てているもの
っていうものに対して、みんな目を向けてなき過ぎるんじ
ゃないかって思ってる。子供の安全安心みたいな学校教育
とかも含めて、子供を取り巻く環境作りがリスクを取らな
い方に行きすぎて、子どもだけじゃなくて社会全体がそう

かもしれないけど、それによって捨ててる物に、あまりに
も無自覚なんじゃないかって。

志賀：それが豊かなことなのね。「ぼんやりとした不安」
で芥川龍之介は死んだけど、茜さんの場合は、その不安が
漠然としているのなら違うように考えるっていうスタ
ンスが、素晴らしい。笑

茜さん：そうでしょ。だからフルタイムで新卒からずっと
同じ会社に勤務して勤続何十年で2週間休み取れて、よか
ったみたいなお人たちが、じゃあそうじゃない生き方をし
てる人たちが、自分には無いどんな物を得ているのかって事
にもものすごい無自覚。無自覚というか自覚する術がない。

佐藤：そうね、知る方法がないよね。

茜さん：今はネットがあるから、情報としては色々な生き
方してる人いるよね一つてのは知ってる。でも情報として
知ってても、結局肌感覚として分かってない。今回の自転
車旅とかも、理屈では自転車旅にはこんなリスクがあるか
も？って頭で考えようとするけど、やっぱりそれを皮膚感
覚に落とすっていうところを、省きすぎてる感じがする。
私自身がそういうフィジカルな感覚が欠落してるなって事
を痛感している。私も都会で生まれ育ってスポーツもして
こなかったからフィジカルな経験がほとんど無い。そうい
う体感に対するコンプレックスもずっとあるんだよね。休
みの日にキャンプとかはしてたけど、そんな週末の娯

楽。自然の中で生活したこともないし、自分の体で乗り越えたっていう経験が少ない。そういう自分自身のコンプレックスってのがものすごく大きいんだよね。インターネットの初期世代でもあるしね。私はこれから先そういう感覚を得るのは無理だろうと思ってる。やっぱりそこは、子供の時期でしか感じられないんじゃないかと思うし。

志賀：いつからでも全然遅くないって思いたいけど。子供の時期って大事だよな。

茜さん：そうだから子に過剰に期待してるところがある。

志賀：いやでも楽しんでる。

茜さん：親にも言われるよ。お前は子どもに過剰に期待しすぎだつて。時々、反省もする。

志賀：子供がワイルドに育つことを期待する娘。笑 言葉ではありのままに育って、とはいえど、その逆をしちゃってる親は多いよね。女の子が生まれたら地下室に閉じ込めるとか、冗談でも言っちゃうような人はいるもの。

茜さん：いやでも笑い話じゃないぐらい。本当にねやっぱりみんな無自覚に閉じ込めてる感じだよ。

佐藤：自分の子供のまわりの親とか見ても、本当にそれはすごいそう。コロナってのもあるんだろうけど、運動会

に行った時、肥満多くなって思った。とくに女の子に肥満が多くて、自分の子供の頃と比べてこんなに多かった？つて。自分の子供の友達とか見ても外で遊ばない、親が遊ばせないのか、もしくは遊ぶ場所がないってのもあるのかな。僕らの時はチャリ族って自転車の族みたいな、狭いテリトリーだったけど目的もなく乗り回してた。もうそんな風景はないなあ。

茜さん：そう、だから私は島に移住したときに、もうみんな毎日岸壁から飛び込むイメージしてたの。ものすごく未来少年コナン見たいなのばかりいると思ってたの。そしたら、とんでもないくらいみんなゲームしてたの。

清水：島にいてでもか〜。

茜さん：私そこで1回打ち砕かれたわけ。私は最初スッゴイ期待してたの。島行ったら、あのインドア派の息子も、ザツワイルドな子たちに、お前もこっちこいよ〜！みたいな展開を期待してた。笑 だから、しょっぱなで期待を打ち砕かれて、思ってたんと違う！つて。よくよく聞いてみたら、その親世代は、無人島まで泳いで潜ってサザエ取って食ったりとか、駄目って言われても漁港で海に飛び込んで、船底に張りついて死にそうになったりとか。みんなそんなことしてるわけ。んで1人か2人ぐらい死んだりも実際にしてるし、まあでもそんなものだよなみたいな。でも自分の子にはさせらんないんだよやっぱり。危ないつて言っつて、自分がしてたことすらさせない。そこにさらに心

配性のじいちゃんばあちゃん加わるでしょ。大人の目を盗んで悪い事することもできなくなった。

志賀：死にかけるんだよね。私1人でロンドン住んでた時、ヤバすぎる出来事とか、死んでただら、みたいなことが何回もあった。どうにかなったけど、まあ、たまたまでもあつて。だからやっぱりさ、人類はリスク回避によって、安心・安全・清潔を追求しなきゃ辛すぎたんだなあとも思うよ。死ぬかも・つて時にさ、何かすごく大事なものとさ、天秤にかけちゃうんだろうね、人間つて。

茜さん：死ななくなったからね。

志賀：お墓に行くとかね、5歳くらいまでで死んだつていう子が、昔は沢山いたんだというのがよくわかる。田んぼの水に落ちた、川に流された、火傷した……。

茜さん：それが当たり前で、5人産んで、全員成人するなんて、あまりなかったことかもしれないね。

志賀：そんな中、戦争の影響も大きかったはずだよな。せっかく育った若者が、第2次世界大戦で何百万人つて死んでしまったから、そのトラウマたるや計り知れない。

佐藤：医学の中の進歩、それもあるよね。助けられるなら、自分の子供であればなおさら未熟児で人工の保育器に入れなきゃ死ぬつてなつたら絶対入れる。目の前にその治

療なりなんりの技術があったらやっぱ死なせたくない、
自分も死にたくないってなる。

茜さん：もちろん昔の人だって、死なせてもいいやと思っ
て死なせたわけじゃないしね。当時は仕方がなかったこと
でも、今はリスクを回避する術がある。それに対して、自
分からリスクを取るっていうのは相当難しいと思う。

志賀：うん、例えば丸慈がね、その自転車乗って遠くまで
行った経験が、後で彼を強くするかも知れないっていう意
味で、なんかこう、大人になって、で、ちょっと鬱々とし
たときに、いや、自転車で外に出て、こっから消えたら良
くね？とか思って、なんか旅に出ちゃえる強さみたいな
になるかもしれないし、自分の感情や、生活をチューニン
グする技にはなり得るだろうなって思うから。私自身もそ
ういうチューニング術を探ってるけど、やっぱり目の前の
心配とか、周りに色々言われることに対する圧力とかに、
すごく弱くって、瞬間的にすごいダメージを受けまくる
から、うーん、もっと強くなりたい。今からでも自分に種ま
きしたい。だから、子供にとっても、今じゃなくていい、
いづれ・・なんてタイミングを見計らいすぎて、でもそん
なことしてたら子供すぐ大人になっちゃうもんね。

茜さん：例えば、子供が自分からね、俺ちょっと旅するわ
って言うてくれたらどんなに楽だろうと思うわけ。親がい
くら止めても振り払って行ってくれたら、多分一番気が
楽。子どもの意思を尊重するっていうスタンスでいられる

から。でも息子の場合はそうはならなかったし、親のいう
ことに従うことに慣れている現代っ子には、難しいだろう
なと思う。そういう子も稀にいるだろうけど、それを期待
してるのは無理だし、そもそもそういう選択肢があるとい
うことすら知らないって事も多い。知らないし、思いつき
もしない。そんなことしていいの？いいわけないよね？み
たいな。私が考えるよりもガチガチだよ頭が。今の子って
本当に常識とかでガチガチ。ある意味で賢くて良い子。

志賀：あとやっぱり親の了承を得ようとするよねー。

茜さん：それもすごいする。

志賀：これしていい？あれしていい？ってね、こんなに聞
くんだって、私聞いたかな、親に、聞いたのかもなあ。

茜さん：木、登っていいですかとか聞くもん。登っちゃダ
メって言われても登れよこっちは思うけど、やっぱ駄目
って言われたらやんないし、それが今の子ども達の処世術
だね。それが一番楽だからさ。今の子どもって効率よく正
解を感じとるんだよね、敏感に。大人がダイレクトに言わ
なくても、遠回しに正解をチラつかせたりとか、誘導する
し。子どもらしい、非効率で無意味な悪さをする、ってい
う余白がないのかな。そう、だから悪いことっていうのも
成熟しなきゃできないことでしょう。昔の子で本当に悪ガ
キってめっちゃ悪いことしてたんだけど、めっちゃ悪いこ
とするってのも、成長過程、絶対あった。ちょっとした悪

いことから始めて、それがだんだん大きくなって、仲間も
増えて、めっちゃ悪いことしていくみたいな過程があった
けど、もうその過程は踏めない。すぐくちっちゃい時に摘
まれちゃうから。

菊池：いきなり悪いことしちゃうし、溜め込んでね、やっ
ちゃう結果的には。

茜さん：それもあるね。

清水：私は出身が北九州なんですけど、夏休みとか長期の
休みがあけると男の子たちの目つきに変化があるのを感じ
てた。それは成長とかっていうよりなんかこう「別の世
界を見てきたんだこの人たちは」っていう経験の持つ輝き
みたいなもので、私はそれがすごく羨ましかったんです。
北九州はもともと治安が良いとは言えない場所だし、わた
しは三人姉妹だから両親がむちゃくちゃ厳しかったんです
よ。夜も絶対外に出ちゃいけないし、友だちの家への外泊
も禁止、門限も大学までずっとあって。

でも、どれだけ禁じられてもおさえきれないんですよ。
なんかもう無理なんです。窓から何回脱走したかわかん
ないし、窓から出るときはいいけど、外から家に入るときは
窓が思ったより高くして何度も膝を擦りむいたし、見つか
ってぶん殴られたり何回もしたけど、やっぱどれだ殴られて
も外の知らない世界を知ることへの関心は抑えがたくて。
もちろん、それで若いうちに事故や事件に巻き込まれて亡

くなる子も多かったから、親が心配するのも今となってはすこしは理解できるし、当時も頭では理解できた。でも、衝動みたいなのは頭とは違うところから生まれたりもするし…。うちの両親はひたすら禁じるという方法を選択したけど、茜さんのお話を聞いているとその辺を親と子が話せるのはすごい羨ましい。私にはその交渉の余地が一切なかったから。絶対禁じられているから、悪いと感じながらも隠れて出て行くことしかできなくて、見つかると殴られる。だから、親と子のあいだに交渉の余地がある、コミュニケーションがある、というのが良いと思います。

茜さん：団塊の世代とかに聞くと、俺たちは親にいくら止められてもやったっていうね。大人に言われたぐらいでやらないお前らは根性がない、みたいなことを言うんだよ、あの世代って。その差って何だろうって考えた時に、やっぱり数の論理がすごいあるんじゃないかって思う。単純に恐ろしく子供の人口が多かったもんね。大人が束になってもかなわないぐらい人数がいた。すごいよやっぱ団塊の世代の数ってね、数の力ってなったら、今の子は本当に一人一人がその反抗心持っても数で完璧に負けるもん。

志賀：長崎さんは、お父さんロックカフェを経営してて、誰よりもロックな人生を歩んだと思うけど、長崎さんはどうだった？

長崎：僕は逆に何もルールの無い家でした。

茜さん：悪いこともした？

長崎さん：いや、そういうことではなくて、うちの両親って二十歳でもう店始めてて、だから自分が別にそんなに勉強しろとかいう立場でもないと思ってるし。うちの兄ちゃんがそれで、中学高校とまあまあの不良になっちゃって。そうずっと僕は必然的にその逆を取るしかなかった。

茜さん：なるほど不良ポジションをとられちゃったから。

長崎：そんなつもりもなかったし、だから、同じような教育を施されても、選択肢は他の要素で全く変わるわけですよ。だから兄ちゃんとかロック喫茶の息子でありながら、一切音楽に興味がなく、生涯エイベックスですよ。今もエイベックスしか興味ない。

佐藤：環境だけじゃないんだなっていうのがわかる。

志賀：友達が人生においてはすごく影響する。

茜さん：それまあその兄弟のポジションとかもあるし。

長崎：いやだからそれだけ、どんなに親が期待しても、そうはならんっていうのが。その種は兄ちゃんも同じように蒔かれたと思う、家でかかる音楽は趣味が良かったし、食べ物も何だろう、僕アレルギー強かったから、すごいオーガニックだったし、でも、内側にはもう全然そういう、何だろう、感性が全く違うところに働いてて、兄は全部コンビニでも大丈夫だし、郊外のショッピングモールみたいな

ところでも生きていけるタイプで、それはもう親が期待したことは正反対だと思うんですけど。僕は何かかストレートに親の期待通り生きてきたと思ったんで、だいたい兄の反動が大きいけど、だから本当は友達が大きかったんだと思います周りの環境が。

久保田さん：清水さんは、その閉じ込められた親に対して、あからさまな反抗とかあった？

清水：力でかなわないから、反抗はできなかったですね。なんかでも、これを文化って言っちゃなんですけど、なんか九州って1世代昔の感じがあって。わたしは1983年生まれだけど、団塊の世代に見たいな育てられ方をしている感じがあるんですよ。だからうちの親も、学校の三者面談とかで担任の先生に「先生、こいつが言うこと聞かんかったら、ぼてくらして（殴りつけて）くださいね」とか、先生に頼むくらいの感じだから 笑。

うちのお父さんは男兄弟でしかも柔道やってて、プロレスも好きで力が強いし、殴ったり殴られたりしながら育った人だから。多分、力の加減とかがあまりわからないんだと思います。だけど、私はお父さん大好きなんです。何て言うか、ネチネチしたことはされなかったしれつと無視するとか、次の日から口きいてくれないとかはなくて。夜中出たのの見つかって、その晩は殴られるんですよむちゃくちゃに。だけど、次の日はもうカラッとしてるんですよ。この一晩で決着みたいな感じだった。

茜さん：なんか裏切られるみたいな不安はなかったっていうことですねだからね、裏表がないんですね。

清水：そうなんかそこが複雑になっていく私はもう多分わからな過ぎストレスだったんだけど、自分でも悪いことしたのはわかってるっていうか。親が心配してたのも今なかったらわかる、わかるけどやっぱそのときは周りの友達みんな夜遊んでる羨ましいし、月に1回くらいいいじゃんと思って、なんか逃亡をはかってたけど。でもお父さんと別にそれで何か関係が悪くなったって感じはなくて。でも、私が大学に入ってしばらくしたら、お父さんがすごく変わったんですよ。殴らなくなった。仕事で大変なことがあったみたいで、大きな転機が父に訪れたんだと思います。それ以来、「他人に迷惑をかけなければ自分が好きなように生きなさい」と言って、もう何も言わなくなった。なんかその時ようやく私も1人の人として見られるようになったのかなとすこし自分が大人として認められたように感じました。それまでは親として、しっかり子どもを守らなきゃってすごい責任を感じてさせてたのかもしれないあとと思います。

茜さん：なんか父親の中には何か正解があったのかもしれないねそのときの、そこにちゃんとね、当てはめなくちゃみたいなのはあったけどそれがちょっと崩れたら、あれみたいなの。

清水：そうですね。

茜さん：父親も多分大人になったんだよね、多分。

志賀：菊池くんは？ 世代が私達とはひとまわり違うよね？

菊池：僕は1993年生まれで、田舎育ちなんですけど。今の子供は正解を感じ取るって話がさっきあったじゃないですか、結構僕はどっちかという、その正解を感じ取って振る舞うみたいな方の世代かもしれない。自分が特にそうだったのかもしれないけど。

僕が育ったのは本屋さんもないような田舎だったから、他の世界や選択肢があることをそもそも知らないというか、このコミュニティの中の価値観とか正解みたいなものになんとか合わせていたのかもしれない。

さっき子供の周りにいる大人の話で、おじいちゃんおばあちゃんと両親の役割が同じになっちゃってるみたいな話があったと思うんですけど、いろんな立場の人が子供の周りにいることってすごい大事なんだなと。確かに自分も子供の時、町にちょっと障害を持った大人の人があったとか、いつもあの人は登下校中に挨拶してくれてたとか、今になっていろんな大人がいたことを結構思い出したりして、そのときはあんまり気にしてなかったけど、確かに今の自分に影響も与えていて、それって意外と大事なことだったんだなと思うというか。一方で、田舎特有のっていうとあれだけど、いろんな人はいるはずなんだけど、価値観とか、いわゆるその地域でいいとされてることみたいなこと

はなんとなく決まって、それ以外のオルタナティブなあり方とか情報がそもそも少ない、みたいなところは自分にとって窮屈だったのかなとは思う。

でも、川とか山とかへの接し方とか、育った場所とか環境との繋がりは今でも感じているし、多分個人として一人一人の人とかにも愛着はあって、だから集団とか、社会ってなった時の通念みたいなものにうまくチューニングしようとしてたかも。そのあと、一回別の場所に住んで、色々な人に出会って、知識もいくらかついた今その時のことを思うと、言えることだけれど。

茜さん：なるほどね、今になってまた振り返って。

菊池：その自然とか、そういうことに関してはすごい自分を作っていると思う一方で、何か一つの価値観の他に選択肢もあるって知ってたら、違ったのかなとか。

佐藤：もともと子供って色んな意味で狭いんじゃない？ 家族は今、核家族で、3人とか4人の世界の中で暮らしてて、さらにマンションの一室っていう、隣のマンションの一つは、挨拶もしないかもしれない閉塞的な空間の中で、選択肢ってかなり限られてる。インターネットが選択肢を提示してくれるかっていったら、情報だけがそこにはあるけど、それを選んで行動するのは難しいってのがある。世界のどこかで戦争が起こってるけど、じゃあ僕らはそれを知

ってはいるけど、何をしたらいいのか分からないっていう風な。そもそもインターネットもなかったし。

菊池：僕らの世代ではちょうど出てきたくらいだと思うけど、そんな使いこなせてはない、みたいな記憶。

佐藤：10歳で2003年だからある程度パソコンで検索できるみたいな感じかな。

今思うと、育った環境はある意味地域社会が成立していたんだろうね。子供の数はめっちゃめっちゃ多かった。僕はベビーブームの末期ぐらいなんだけど、子供はすごいたくさんいたからその分悪ガキも多かった。そして群れてた。けど今だと孤立するんだよ、悪ガキって。そういった悪ガキグループみたいなのが地域コミュニティの一部として成り立ってた。

今は子供を見る目線って一人っ子だとしたら親の集中砲火を浴びちゃう。けどもし子供多かったら目線が分散される、で、もう親は見れないってなる。そこで隙間が生まれるんだろうね。

昔は逃げようとしたら逃げれたけど、今逃げれない、そういった状況みたいのがあって、清水さんのほら、北九州の話で、外に行けば誰かがいた・・・

茜さん：そう遊んでる子たちがいたって。

佐藤：今ってどうなんだろう、外に誰がいるからっていうので1人で出てくのかな。

志賀：長崎くん、仙台って町どうだったのかな、昔。

長崎：えっとね、僕はあれなんです。作りたての新興住宅地だったんです。そこは田舎でもないし都会でもないっていう。で、これから家を作るための造成した土地だけが。だから自然にヒスロムの感覚に近いと思います。何かやたら自由だけど、何も抛り所はないという感じの環境で風景としては。仙台はもう昔はすごいなんだろう、聞く限りは、夜女の人が1人で遊ぶとかは結構危ない時期もあったっていうのは結構聞いたりします。一番町でも危ない時期はあった。

茜さん：バブルの後だね、じゃあ。

志賀：今話してたようなことを茜ちゃんはオルタナティブがない閉塞感って言ってたよね、教育とかもそうだけど、別の選択肢は今なくなってきた。

茜さん：めっちゃあるんだよ、本当はあるんだけど、そういう情報はめっちゃあるのに皮膚感覚が抜け落ちてるから、全く体感できてないんだ、全然。私は六本木とか、その辺で育って、子供の頃からもう本当に、経済も文化も花盛りっていう、バブル期真っ只中のところで育って、ある意味すごく刺激があった。やっぱり世界っていうのは、

本当に近かった。でも子供だからね言うてもあれだけど、うん。あんなに世界を日本の中で感じられるのは東京のあの中心だけだと思う。

志賀：いろんな人達がめっちゃいたってことだよな。

茜さん：うん、本当に文化人から、ホームレスから外交官からヤクザから芸能人まで。本当にいろんな人がいたと思う。私が大人でそこに居たら、また全然違ったかもしれないけど、子供でいたから。遊ぶ公園ねーな、みたいな感じで。すごく特殊なところで育ってるなっていうのはあるけど、でもまあ、特殊すぎて子供には全く読み解けるものなかった。道の脇に並んでる建物、その建物で何が起きてるか子どもは分からないよね。子ども心に怪しげな店とかも沢山あったけど、その店に入って、中で何が起きてるのかは、一切知らずに横目に見ながら通学している。ここが世界とどう繋がって、何がそこで起きてるのかっていうところまでは、やっぱり子供の感覚では想像ができなかったから。それが私の原風景なんだけど、その風景が意味することが分からない。ものすごい世界の渦の中にいるのに、そこだけポカンと無風だった。私の母親なんかは、バブルの頃の港区に暮らしたことはすごい刺激的だったと言うよ。世界を肌で感じてたって。でも子どもの私としては、遊ぶ場所もないし、自然もないし、金が無いと何もできないしね。あまりに都心すぎて、悪ガキっていうのも一切いなかった。

志賀：悪いのは大人ばっかみたいなの。

茜さん：そうそう。本当に本気の大人の世界だったから。

志賀：何歳までいたの？

茜さん：高校卒業まで。

志賀：すごく感じ始めない？ 色々なことを。

茜さん：もちろんすごく感じてるよ。周りでもものすごいことが起きてるのはわかってるけど、コミットすることができないんだよね、港区のハードルが高すぎて。高校生くらいになると、学校が中央線沿いにあったから、小劇場とかライブハウスとかサブカルとか、お金がなくてもコミットできる世界があって、そこで初めて大人の世界と繋がった感覚があった。だから今でも私は、中央線で育ったと思ってる。港区のグローバルでお金が物をいう世界っていうのは、幼い私には距離感があるよね。

志賀：悪ガキがいなかったと。

茜さん：周りの大人が悪すぎて、子供が悪さできるような環境じゃなかった。レベルが違いすぎて。転校生で、田舎のヤンキーが転向してきたことがあったの。ポンタン履いて漫画みたいなヤンキー。でも、なんかその子も1週間く

らいですっかりいい子になった。ヤンキーのまま群れる仲間もいなかったしね。

志賀：やっぱり孤立って精神的に凄まじいことなんだな。

茜さん：そうそう、だから本当に悪い子も、1人だと孤立するでしょ。前にいたとこだと、ヤンキーじゃないと仲間に入れてもらえなかったのかもしれないし。でもそれが通用しないってなったら、急に温和になった。

志賀：適応能力か〜。

茜さん：だからヤンキーはめっちゃ適応能力高いと思う。

志賀：その適応能力が高いついていうのと、菊池くんの世代からやや始まる、親の空気を読む世代っていうのも、同じことだね。子供の敏感さは本質的にはそんなに変わらないんだけども、その肌感覚が変わってきているんだと思う。いかなる時も、子供は空気を読んで、ベストな応答をしているだけなのかもしれない。話は変わるけど、茜ちゃんが、移住してストレスのあり方が変わったと言っていたけど、その辺りのことを話してもらってもいいですか？

茜さん：私は都会で育った人間だから、自然体験ってのが本当に皆無だった。貧乏だったから家族旅行といえばキャンプだったけど、それもたまにね。年に数回。でも小学生の時に、祖父母が和歌山にいた事があって、長期の休みは

半分くらいそこにいた。その時の体験っていうのが私にとってすごく大きかったと思う。毎日川で泳いで、田んぼでカエルつかまえて、夕暮れに土手に寝そべって空を眺めて。一瞬一瞬がキラキラしてて、すごく幸せだった。でも基本的には都会育ちだし、心も体も自然の中で自由でいられるほどの感覚は持てずに育ったなと思ってる。

うちの母親は、子供の頃にナウシカみたいな生活をしてみたい。一人っ子で、いつも虫とか追いかけてたから、その多幸感が自分を形成しているって今でも言ってる。田舎から都会に引っ越す事になった時が、人生で一番落ち込んだって。だから今の田舎暮らしは、その多幸感を再現してるみたいな感じなの母親は。だからすごく感覚的にね、腑に落ちてるんだろうなこの人っていうのはある。島で畑を耕して、自然環境とかに自分を投影させるということができてる。でも私はその母親見てて、そこまでの感性が私の中には無いなっていうのは感じてる。

志賀：これから、発芽するとは思わないの？

佐藤：何が起るかわからんからね。

茜さん：わからんけどね、今のところまだ遠い。

志賀：ここに、「モモ」っていうミヒヤエル・エンデの本があるけど、これ、私は子供の頃大好きな物語だったけども、今の自分は、モモのように空を何時間も眺めていられ

ないわけ。何が「豊か」なことなのか、見失ってる。自分の中に、探せど探せど、「近代」しかなくて。

茜さん：私は高卒で知性も知識も持ち合わせてないんだけど、都会で育って口八丁で生きてきたせいとか、中途半端に論理的に言語化しようとするんだよね。皮膚感覚とか身体的体験がなさすぎて。スポーツやったり、アウトドア体験がある人って、何か人生観違うような気がする。私の勝手なイメージかな。そういう人たちをつい神格化してしまう。高卒が大卒を神格化するのと同じかも。

志賀：子供の頃からずっとスポーツしまくってたけど、今は体なまりまくりで、辛いだけだけど。

佐藤：想定した動きに身体がついてこない。

茜さん：でも野生じゃない？

佐藤：野生じゃないと思うな。スポーツはすごく近代的な身体の使い方なんじゃないかな。

茜さん：言葉と体について、いつも考えてるけど、人口が爆発したら、その人口を保持するために、言葉を残す技術も結局発達させないと、その人口を養えないし、管理できないっていうフェーズに入るし、文字とかはその必然性の中で生まれるわけだね。言葉とかフィジカルな体験として伝承していくことに無理が生じて初めて文字が生まれる

わけだから。言葉を文字にして残すって、人類の発明の中でもものすごく大きいでしょう。これが人類の終わりの始まりだったんじゃないかと思う。

志賀：外部に消えない言葉、活字を持って、より多くの人と同じ幻想を信じるようになった。

茜さん：儀式とか、歌とか、実体験とか、活字化されてないものをテキストに置き換えた瞬間に、相当歪むでしょ。実体験を伴わない伝承でどんどん歪みが大きくなって、その結果が今だから。何がどう歪んできたのか、みたいなことに対して無自覚すぎる。本当に、縄文くらいまで遡らないと分からんことだなと思った。今回、北海道の旅で感じたのは、アイヌの人たちは、活字を持った人たちに自分たちの文化、生活の大部分を侵されてしまったんだということ。今やそのひずみに対して、あまりにもその歪みが大きくなりすぎちゃったから、どこから手つけていいか全くわからないんだけど。違和感だけは拭い去れないよね。これまでその違和感に対して、化学とか、西洋哲学とか、そっちで補填しようとしてきたけど、無理やで。コロナとかで考えても、全く太刀打ちできてないってわかってるけど、もう人類はもうその道を模索する以外の方法がもう見つからない。でも今本当に、シリコンバレーとか最先端の人達が、もうやばいってのを肌で感じ始めてる。末端はまだSDGsとか、いわゆる持続可能社会とか言ってるけど、あれがどんだけやばいかわかるよね。

志賀：どう考えても思えないね。

茜さん：進歩っていうから変なんだよね、変化だよ。争うことができない変化。

志賀：変化だね、それで私は変化に順応してしまった。その中でみた「幻想」はすごくあったんだね。やっぱ80年代生まれで、高度経済成長の残り香を感じながら、愛知県は特に機会産業が強くて、だからこそ、逆にそういう近代的な物事に、抗う人達も沢山居ることは知ってる、公害もあるから。

茜さん：グローバルだからね、問題が地球規模になっちゃったもんね。

志賀：茜さんが移住して、よかったって思うところは？

茜さん：島に来てからは、子育てしかしてない。逆に子育てに専念できてるから、めっちゃ楽だっというのがある。都会で子育てに専念するのは全く感覚が違う。都会で子育てに専念してても、毎日公園行って、買い物して、ご飯作って、っていうルーティンしかないから。ここでは、生活も遊びももっと多様性があるし、豊かだと感じられる。あと、島の子たちがゲームばっかしてキャンプもしたことないし、しまなみ海道ってサイクリングルートもあるのにサイクリングもしたことないって言うから、そういう子達引き連れてサイクリングしたりキャンプしたり、そんな事

もやってる。「こども組合」っていう、子ども主体の遊びサークル作って。なぜか大都会から来た、アウトドア何も知らんはずの移住者が、ずっと島で生まれ育ってるような子供たちに自然体験をさせるっていう、笑ものすごく歪んだことをしてる。

志賀：茜ちゃんが「こども組合」を作ったの？

茜さん：作った。

菊池：何人くらいいるんですか島全体で。

茜さん：人口はね4500くらいかな。小学生くらいの子どもの数でいったら150とか、そんなもんかな。

志賀：声がけはどうやってしたの？

茜さん：最初は自分の子供の同級生で、その兄弟もいるから、またその友達も来る、みたいな感じで、今組合に参加してくれてるのは50世帯くらいかな。組合活動は、基本ただ遊んでるだけ。島も高齢化で耕作放棄地すごい増えて、特に私が住んでる集落はものすごく高齢化率が高くてね。昔は山のとっぺんまでみかん畑だったみたいだけど、今は全部森に戻ってる。そんな耕作放棄地の一つを貸してもらって、八朔の木が10本くらいあって、家では食べきれない量になる。でも売り物にするには足りないし、素人栽培だしね。なら子供たちと一緒に収穫をして、インターネットで売ろうかなって。それ売って、それを子供組合の活

動費にあててる。だから子供の自治だよ。子供たちにお礼の手紙書かしたり、伝票書かせたり、箱詰めとかも作業もさせて。普段は親のお金で遊ぶの当たり前って感覚だけど、自分たちの稼いだお金で遊ぶのが楽しいでしょ。

志賀：どれくらい稼ぐの？

茜さん：大したことないんだよ5、6万とか。普段やってる遊びも大してお金かかんないからさ、ライフジャケット買ったり、日除けのタープ買ったりとか、それぐらいのもんだよ。地元のマルシェイベントに出店してもらったこともある。お母さん達が編んだミカンの形の帽子を被って、子供たちに売り子させてね。そのままでなかなか売れんから、お母さんの誰かがカットフルーツにして売ったらいいんじゃないの？って思いついて、お母さん達と裏でみかんを剥きまくってパック詰めして。子どもらが会場を歩いて、押し売りしたりして、笑

志賀：ほんと、茜ちゃんのインスタがめちゃ面白いの。

茜さん：子供が仕事の真似事するようなのって、第一産業じゃないと難しいでしょ、第2次、第3次とか、サラリーマンの親だと全く何やってんのか分からないからさ。地域に第一次産業があるっていうことを、フルに活用してる。

志賀：丸慈がインドアだって言うけど、そうじゃないね。

茜さん：丸慈はスポーツとかも一切やらないタイプだよ。私の歳の離れた弟もね、東京でネットゲーム廃人みたいな感じだったんですよ。ネトゲやって10年、昼夜逆転して、昼間寝てる姿しか見たことない。弟は私が育てたんだよねって言ったけど、要は、親も歳とってからできたもんだから、もう子育て疲れちゃったわけ。もともと社会に適應するのが苦手な子だったから、学校の先生もお手上げで。中学校の時に両親がニュージーランドに叩き出しちゃった。でも、弟はニュージーランドでもうだつが上がない毎日を過ごして、ボケっと日本に帰ってきたけど、結局日本の社会にも馴染めず、キャリアも学歴もなんもないからずっとフリーターかネトゲ廃人。できれば東京でフリーターだったんだけど、両親が島に来て家を作るってなったときに、島に呼んだ。両親も、この弟に真正面から関わってなかったっていう気持ちがどこかにあったんだと思う。それで、父親が家を作るから来いって言って。

志賀：種まきは何歳になってもいいんだね。

茜さん：そしたら、それまで何のスキルも無かったけど、水を得た魚のように木工とか大工仕事にハマってね。元々熟考するタイプなのね。人のペースに全く合わせられないんだけど、自分のペースでなら根気よくできる。独学ですごい色々調べたりしてた。興味ないことには一切触手が動かないわけだけど。で、木工仕事が少しづつ社会との接点になっていったよね。第一、若い子が島にいる事自体すごく珍しいわけ。近所の人たちも色々気にかけてくれて、君





53200円
せとが
175200円

れもん

はっさく

糸工はっさく
丸景菓

あんせいがん
たべてね

11月25日
11月25日

Live
Love
Laugh

んとこの弟はいったい何をしてるんだ？仕事はあるんかい？何か世話してやろうか？って話をよくしてくれて、ありがたいことにそれで隣の島で大工見習いの仕事も見つけてくれた。最初は独学でやってたけど、元々細かい作業ができる器用な子だから、すごく技術レベルが高いって褒めてくださって。そういうことでまた本人もそうやって自信をつけて、トントン拍子に最近嫁まで来てくれて。

茜さん：もう親はいつでも死ぬる。

佐藤：もう結婚したんだ。

茜さん：結婚したの。2週間前に！笑私がかくっつけたんですけどね。ふふふ。体育大出身のたくましい子。我が家にはまったくいなかったタイプの、筋トレ女子。大阪の子で、地域おこし協力隊で隣の島に来たっていう。

志賀：真正面から関わられていなかった・・・という負い目かあ。私なんて、椎太（長男）生まれた瞬間に、負い目を感じたからね。笑 産んだ瞬間からマジごめんって、なんかもう、ありがとうとごめんが入り乱れて。

久保田さん：負い目あるよね！僕も丸慈が産まれてきたときにごめんって感じだった。

志賀：わはは、私も一緒だよ。病室で対一になったとき号泣したよ。

久保田さん：なんだろうね、あの後ろめたさは。

志賀：妊娠してる時にね、どんな夢見てたかっていうと、ぼっぼとしてて忘れちゃうの、子供のこと、それで死んじゃったとか。大量の汗で目覚めて、あれはなんだ、頻繁に見たよ。それで負い目しか感じなくなって。私のところなんか生まれきてごめんさいって、はあ？って感じだよ、子供からしたらさ。

茜さん：私それめっちゃ見てたよめっちゃ見てた。

志賀：子供のことどこかに置いてきちゃって、忘れてて、一週間経っちゃったどうしようみたいな、そんな夢。

茜さん：気がついたら何日も車置いてたわ！って青ざめるみたいなね。

志賀：わかる、本当に怖すぎる、そんな夢ばっか見てた。

茜さん：でもいつからか見なくなったね。

志賀：そうね見なくなったね。

茜さん：私も子供産む前、ずっと不安で。友達に大真面目に相談してた。子供って落としたら死んじゃうかもんないし、何かそんなものを世話するなんて無理やろって。

志賀：やっぱり痛感するのは、自分が大人になってから周りに子供達がいなかった環境は良くなかったってことだなあ。子供だったくせに、子供のことを知らないんだよね。清水さんの北九州の実家の子供が常に集っている家の感じとか、凄いもん。常に子供達周りについて、なんか知らない間に抱いてて、みたい。長崎くんも、姪っ子2人かなり育てて、プロ級だし。子供が周りについて、自然に触れ合っているかどうかは、今度、自分が生むっていうときに本当に効いてくる。私、赤ちゃんちょっと目を離した隙に死ぬかもしれないと思って、寝てるのにガン見してるみたいな。どンドン勝手に追い詰められて行ったなあ。誰かに、大丈夫、大丈夫、って言われたかった。

茜さん：でもその友達が、例えば指も、ちょっと変な角度で曲げたらすぐ折れるでしょって。でも折ったことないし、そんなに簡単になんか折れたりとか、死んだりとかしないもんだからって言われて。そういえばそうだよなってハッとして。

佐藤：子供しかも柔らかくできてるよね。

茜さん：うちの母親に、子供ってのは神様が守ってるから簡単には死なないんだよってずっと言われてる。私なんか適当すぎて、しょっちゅう哺乳瓶にカビ生やしてたわ。

久保田さん：カビ、生えてた。笑



茜さん：スリッパの裏紙めさせとけて言ってたもん、うちの母親。

志賀：久保田くんだけ？・・・男親は「大丈夫」って言うのが仕事ですよって言ってたの、めちゃめちゃ覚えている。

茜さん：でも本当に追い詰められたらお前が言うんじゃないよってキレるけど。笑 本当に追い詰められたらね、お前が大丈夫って言うなって。そこはね、言うタイミング難しいよね。まあ私ですら1人目はすごい追い詰められたしね。

志賀：茜さん、移住してから怒らなくなったって言ってたもんね。

茜さん：怒らなくなった。本当に私本当に虐待母だったと思う。丸慈のこと、人格否定も甚だしい怒り方してた。本当に未だに言われるもんね「母ちゃんさ、ぼくに死ねって言ったよね」って。いやお前、それは前後の文脈っていうのがあってさ、って、言い訳しまくるんだけど、一方で、私一生謝るから、何回蒸し返されても一生謝るから、何度でも言えと。そう言いながら実際はイラってしてるんだけど。笑

志賀：でも丸慈それ言うからいいよね。そう言えない子が病んでいくわけであって。

茜さん：そう、でもそれもそうだなって思った。

志賀：親も間違える。パニックる。色々やっちゃう。でも、一生謝るからって、凄い素敵だね。「マジごめん」って。

そろそろ次の話に移ってもいいかな。茜さんが、里親になった経緯を聞きたくて。やっぱりね、さっき私、話したように、子供がわからなさすぎてガン見しちゃってるような人だから、里子を育てている、って知った時、すごい、一線を越えた！って思ったの。命を預かる決心をしたんだって、なんかものすごいことのように思った。里子の制度が日本にはあるのだから、自分もそれをやろうと思えばできるわけで。私の周りでも、子供が大好きな人たくさんいるけど、里親になったのは茜さんだけ。

茜さん：子供が好きっていうのとは、全く違うんだよね。

志賀：唯一、里親になってるの茜さんだけで、すげえ、と思った、本当に。

茜さん：特別養子縁組と里親制度っていうのは全く違うものなの。特別養子縁組は、完全に自分の戸籍に入れて実の親子になる。実親との養育関係も完全に断たれる。「特別」じゃない普通養子縁組っていうのは、相続関係で大人になってからするのが一般的なやつね。子どもに恵まれなかった人が利用するのは特別養子縁組。それに対して、里親制度っていうのは完全に行政からの委託。行政の児童福

祉の受け皿として里親に育児を委託をするっていう制度だから全く親子のスタンスも違うの。里子は自分の戸籍には入らないし、養育権も実親とダブルになる。

昔は実親じゃないスタンスで、委託されて他人の子を育てるっていうイメージに、んん？って思ってた。どう育てるんだったら自分の子として育てないと関係性が分からんなあって感じがあって、里親はなんか違うなと思ってた。

だから最初は特別養子縁組で赤ちゃんが欲しいって思ってた。三人目は特別養子縁組で赤ちゃんもらおうってめっちゃ調べて、実際研修とかも受けに行ったよ。特別養子縁組って児童相談所から直接縁組するときもあるんだけど、民間の斡旋団体っていうのも全国にいくつかある。その中で、実子がいても赤ちゃん斡旋してくれるっていう東京の団体の研修を2人で受けに行ったりして、かなり真剣に考えてた時期があるんだよね。でも最終的に、まさかの「夫婦が同居してない」っていう所で裁判所の許可がおりないことが判明した。その時は既に、私が島で、夫が大阪の遠距離生活が決まったから。夫婦が物理的に離れてたら駄目っていう、そこ？って呆気に取られたよ。実際に、一緒に生活してない家族なんてめっちゃいっぱいいると思うんだけど、そういうところは、制度の歪みを感じたよ。養子縁組って、オルタナティブな家族像を形成するための制度のはずなのに、一方でものすごく正統派な家族の形を強要するのかって。特別養子縁組はそもそも、異性同士で婚姻



関係が無いと認められない。里親は同性カップルでも、未婚でも、単身でもなれるのに。

志賀：今後変わるかもしれない？

茜さん：今後変わっていくんじゃないかな。実際に議論されてるし。これまで同性カップルで里親登録した例はある。でも、登録はできたけど実際に委託を受けたって話は聞かない。そこはまだまだ、すごくハードル高い。海外ではかなりポピュラーになりつつあるのに。里親ってその自治体の児童相談所に登録するっていう形だから、各自治体によってかなりカラーが違うみたい。里親制度自体は全国的に厚労省管轄なんだけど、実際の運用になると地域差がある。大阪が唯一、同性カップルを里親認定したはず。それが全国初だったはずだけど、多分彼らも、まだ委託は受けてないはず。登録と委託の間には、まだ現実の溝がある感じがする。

志賀：それは児相との関係っていうことか。

茜さん：そんなわけで、制度的な障壁があって特別養子縁組は諦めることになった。最初は3人目は産むつもりなかったんだけど、仕方ないから自分で産む事にした。笑

志賀：「やっちゃったぜ」っていう妊娠検査薬のLINEが送られてきたの覚えてるよ。笑

久保田さん：知らないんだけど。笑

志賀：でも要は茜さん、切迫流産が大変だったのよね？

茜さん：2人目の時に、切迫流産で長期入院したから。産婦人科の先生から、3人目も切迫になる可能性高いよって言われてたし。だから3人目も入院になるんだろうなって思いながら作って、案の定なってハイ入院します、って。

志賀：その辺りの時期のこと、よく憶えてる。その頃、4人でも5人でも自分欲しいんだけど、要は母親とか家族に迷惑かけちゃう、何ヶ月も子供お願いすることになるから、里親がいいかなって、言ってたね。

茜さん：切迫でも迷惑かけるし、年齢的にも妊娠出産キツイし、なら現実に関が育てられないっていう子がいるわけだから、里親でも別にいいんじゃないみたいな、そういう感覚になっていった。

志賀：5人も6人も産むっていう話は、今あまりないね。ああでも、昔、「7大陸の子を産むのが夢」っていう子に会ったなあ。笑あの子は今いったいどうなったんだろう。つまり、そういう感じもなんか聞かなくなったな。

茜さん：少子化とか不妊とかって、晩婚化もあるよね。20歳ぐらいだったら産めたはずの人でも30過ぎになると条件

が変わってくる。晩婚から何人も産むってなると、キツイわな。

志賀：やっぱり子供を持つか持たないか、できたできないの話が多すぎて、日本は、里子をとるか養子縁組するかという話のごっそり抜けて、とても少ないね。

茜さん：子ども欲しいけど不妊で悩んでる人も、逆に自分の子供は2人も3人も産んでるって人も、いざ里親って話になると「私には無理」って言う人が多い。でも何が無理なのかは、すごく漠然としてるわけ。そこを禅問答みたいに問い詰めていくと、無理っていう思い込みが崩壊していく。なんとなく血が繋がってないとなーって言うんだけど、でも血が繋がってない子を育てらんないって思う理由ってなんだろう。実際やってもいないことを無理って思う、その感覚が融解していく可能性もある。でも、それ融解していったからといって、感覚的にいけるってなるかっていったらやっぱりそのすごくハードルは依然として高いし、漠然とした不安ほど強固なものもないなって感じることもある。ただ子ども可愛いってのは、そこが違うなと感じる。

志賀：あと自分が産む方がずっと難しいじゃんって、茜さん言ってたね。

茜さん：だって出産って基本的にハイリスクだもん。里親ならそのリスク回避して子育てできるんだからね。